6．人間観

6－1．人間の分類

6－1－2．技能による人間の分類

猟をすることをイラマンテ　iramanteといい、猟の名人をイソンクル　isonkurという。イソンクルはすべての動物をたくさんとる人のことである。そういう人の家にはヌサ　nusaの大きいのがあった。魚とりがうまいのもイソンクルに違いないが、アイヌは皆魚をたくさんとったので、魚をたくさんとる人を、(アィヌ　オピッタ　チェプ　ポロンノ　ウク、チェプ　ポロンノ　ウク　ウタラ　アナクネ　オピッタ　オカィ　アン　ペ　aynu opitta cep poronno uk，cep poronno uk utar anakne opitta okay an pe) 特にイソンクルとは言わない。

彫刻（キムシペ　ヌイエ　kimuspe nuye）は男の仕事で、裁縫（ケシペキ　kespeki）は女の仕事である。

女性の針仕事についての評価には次のような表現がある。

「針仕事の上手な女たちは、旦那さんたちも良い服を着る。不器用な女達は旦那さんにもとても変てこな着物、変てこな脚半しか着せられない。(ケメィキ　エアシカィ　ウタラ　アナクネ　オクカィ　ウタラ　ピリカ　イミ　キ。アィカプ　ウタラ　アナクネ　コロ　カムィホクフ　エネ　ネ　ヤクカィ　オッアラ　ヘマンタ　イミ　ヘマンタ　ホシ　ケライポ　ウシ。kemeyki easkay utar anakne okkay utar pirka imi ki．aykap utar anakne kor kamuy hoku ene ne yakkay o'ar hemanta imi hemanta hos keraypo usi.)」。「あの女の人は上手だ（トオンクル　アシカィ　ル　アン　toonkur askay ru an)」とか「あの女の人はとても不器用だ（トオン　メノコ　アナク　オッアラ　アィカプペ　エシタプ　アン　ネ　toon menoko anak o'ar aykappe estap an ne)」とか噂し合って、若い女達は競争できれいな脚半（図14～16参照）を恋人達に縫った。

「あそこにいる人はよく働くようだ(トオンタ　アン　クル　アナクネ　ピリカ　モンライケ　シラン　toonta an kur anakne pirka monrayke siran)」

「あそこにいる人は働きすぎだ(トオンタ　アン　クル　アナクネ　モンライケ　カシパ　toonta an kur anakne monrayke kaspa)

〔本別　沢井トメノ氏〕

6－1－3．身分・家系について

あるべき家が全滅するということはないものだ、だれか一人は残るものだ（エカチ　シネン　アン　ナンコロ　ekaci sinen an nankor)と言われていた。ある年取ったおばあさんが祖母(オ

ンネ　フチ　onne húci) が私のことを次のように言ってくれたので、母親は私を厳しくしつけた。

「この子供は、和人の子だけれど決しておろそかに扱うなよ。お前達のあとでこの子供は栄える子に思える。大事にして育てなさい。タアネカチ　アナクネ　オヤプ　サニ　ネ　コロカィ　イテクケ　オロイサムノ　カラ　アニ。エチ　オカケ　タ　タアン　エカチ　ヤヤスラシテ　クン　エカチ　コトム　アン　ナ。ピリカノ　カラ　ワ　レス　ヤナニ。 taan ekaci anakne oyap sani ne korkay itekke or'isamno kar ani. eci okake ta taan ekaci yayasuraste kun ekaci kotom an na. pirkano kar wa resu yan ani.

〔本別　沢井トメノ氏〕

6－1－4．その他の分類

泥棒

もしお前が泥棒したら、1、2回はまだよいけれど3、4回となれば、いわゆる泥棒神がお前の襟首につき、「早く取れ取れ」と言うので、お前の心は落ち着きを失う。泥棒神はお前が取るまでお前の心を突っつくのだ。エ　イクカ　チカナク　アススィ　トゥスィ　ピリカ　レ　スィ　イネ　スィ　ネ　チカナクネ　ネ　ワ　アン　イクカカムィ　エ　クッケウェ　タ　モナ　ワ　「エンコタ　ウク　エンコタ　ウク」アリ　アゥキ　カン　エ　ケゥトゥムフ　モィモィ　チカナクネ　エ　ウク　クニ　パクノ　エ　サムベ　コィキ　シタパン　ネ　e ikka cikanak assuy tusuy pirka korkay re suy ine suy ne cikanakne ne wa an ikka kamuy e kutkewe ta mona wa "enkota uk, enkota uk" ari awki kan e kewtumuhu moymoy cikanakne e uk kuni pakno e sampe koyki sitap an ne.

このようにして、子供は、「盗むな、嘘をつくな（イテクケ　イクカ　アニ、イテクケ　スンケ　アニ　itekke ikka ani, itekke sunke ani)」ということを何度も何度も言われる。

〔本別　沢井トメノ氏〕

6－4．身体の世話

6－4－4．病気と治療

私が小学校に通っていた頃、皆からいじめられてとうとう耳が聞こえなくなったことがある。そこで母はヌプン　ノヤ　nupun noya（普通のヨモギと異なり臭いがきつい）をもんで頭に付け、布を当てて縛ってくれた。

イム　ímu

私の母はイムする人だった。ある日、目をこすりながらチエトィ部落の裏にある大きな沼から戻って来た。どうしたのかと尋ねると、沼の縁で野菜を洗っているとカエルがオオワッ　oowat と鳴いた。すると自分は野菜を全部沼の中に投げてしまった。それが情けないから泣き泣き戻って来たという。これは、母親がカエルの鳴き声にイムしたからだ。母はときおり血が騒いで私にせっかんすることがあった。これもイムしたからであろう。

沢井家のエカシ　ekasiはおもしろい人で私の母親(コルチ　korci)をイムにして(イムレ　imure)からかうことがあった。何かを言って驚かすとイムになり、エカシを追いかけまわす。私が「ハポ　hapo（かあさん）やめれ、ハポやめれ」といってその後を追いかけた。周りのものはおもしろがって見ていた。

イムから意識を取り戻すと、その間に何をしていたのか記憶が無いそうだ。

〔本別　沢井トメノ氏〕

6－4－5．お守り・まじない

子供が病気になると黒糸と白糸をより合わせ(レタル　ニゥト　ネワ　クンネ　ニゥト　カエカ　retar niwto newa kunne niwto kaeka、クンネ　ニゥト　ネワ　レタン　ニゥト　エカエカ　ヤン　kunne niwto newa retan niwto ekaeka yan）たものにイケマ（ペーヌプ　pénup）を通してぶらさげたり、頭巾（コンチ　konci）（図17参照）の頭につたりした。

風邪がはやるとギョウジャニンニクの葉(プクサ　pukusa)を小さな袋(ポンプクル　ponpukuru)に入れて子供の衣服の襟につけた(オシケ　プクサ　オー　ワ　エカチ　オクケウェヘ　ワ　アラッキレ　oske pukusa o wa ekaci okkewehe wa aratkire)。そういう時には黒糸と白糸をよってそのひもを着物に刺して（イミ　アコヌィヌイェ　imi akonuynuye）つける。

また、黒糸と白糸は魔除けにも使う。悪い神に追われた時、黒糸を後ろに投げ、白糸を前に投げると、黒糸はあたりを真っ暗にし、白糸は前を明るくするので逃げることができた（ウェン　カムィ　イノシパ　ヒタ、クンネ　ニゥト　アオシマケン　アネヤプキリ。レタル　ニゥト　アコッチャケン　アネヤプキリ　コロ、クンネ　ニゥト　アナク　シレクロク　レタン　ニゥト　アコッチャケン　アネヤプキリ　コロ　アネトコ　シリペケレ　ワ　キラ　アネアシカィ　wen kamuy inospa hita, kunne niwto aosmaken aneyapkir. retar niwto akotcaken aneyapkir kor, kunne niwto anak sirekurok retan niwto akotcaken aneyapkir kor anetoko sirpeker wa kira aneaskay）という話がある。

子供が病気になったとか、さわりがあったとか、何か悪い出来事があった時、それに向かって行進し、悪魔払いをすることがあった。これをニウェン　アプカシ　niwen apkasという。

イケマは、口に含んでフシ　フシ　hus husとはきかける（イピル　ipiru）ものである。

〔本別　沢井トメノ氏〕

6－5．人の一生

6－5－1．結婚

結婚することをアシリ　ウムレックル　ア　カラ　asir umurekkur a karという。

〔本別　沢井トメノ氏〕

6－5－5．技術などの習得

生後半年でコルチ（おばあさん）にもらわれて、全てをアイヌ語で育てられた。

「水を持って来い（エタク　ワクカタ　ワ　エク　etak wakkata wa ek)」とか「薪を持って

来てくべなさい（エタク　ニ　コレク　ワ　アペ　アレ　etak ni korek wa ape are)」とか言われた。

だんだん大きくなると「このようにして煮なさい(タアンペ　ネプコン　スケ　アニ　taanpe nepkon suke ani)」とか「このようにして煮るもんだよ（タアンペ　ネプコン　エ　イキ　カン　スケ　クン　ペ　タパン　ナ　taanpe nepkon e iki kan suke kun pe tapan na)」とか言って料理の仕方を教えてくれた。

また、「今日は山に行って木の皮をはいで来るからな。(タント　アナク　エキムン　パイェ　アン　ワ　ニカプ　ア　カラ　ワ　サプ　アン　ナンコンナ　tanto anak ekimun paye an wa nikap a kar wa sap an nankonna)」と言って、白い犬を一匹連れて、オヒョウの皮を採りに行った。「ここに座ってこの外皮を取り捨てて、（量を）少なくして、背負って行かなければ、盗みをしているのだから、警察につかまるよ。(タアンタ　ロク　アン　ワ　タン　ニカプ　アアレ　ワ　ポンノ　ア　カラ　ワ　ソモ　ア　セ　チカナクネ　イクカ　アン　ル　ネ　クス　エムシコロペ　オロワ　アノカキシマ　ナンコロ　taanta rok an wa tan nikap a are wa ponno a kar wa somo a se cikanakne ikka an ru ne kusu emuskorpe orwa anokakisma nankor)」と言って注意されたのを覚えている。

天候についても教えられた。「今日、雨が降るかも知れないよ(タント　ルヤンペ　ルィ　ナンコン　ル　アン　tanto ruyanpe ruy nankon ru an)」とか「突然雷がして夕立があるだろう(エクシコンナ　カムィ　フマシ　テク　カムィ　ルヤンペ　ルィ　ナンコン　ナ　ekuskonna kamuy humas tek kamuy ruyanpe ruy nankon na)」とか教えられた。

このように、その場その場で起こる事をすべてアイヌ語で話し、夜になって「今日は何を言った」と尋ねられ、そのとおり繰り返すと「よしよし、よく覚えたな。(ハパパ、ハパパ、エ　エラマン　ル　ヘ　hapapa, hapapa, e eraman ru he)」となぜてくれた。

このようにして、13歳までは家で完全にアイヌ語で育てられた。14歳からは大人の間に入って働くようになったが、それまでにアイヌ語はすっかりのみこんだ。

「今日は私は足袋さしをするから、お前は一人で何かしていなさい(タント　アナクネ　ク　タムビカル　クス　エ　プィノ　ネプ　カィ　キ　tanto anakne tampikar kusu e puyno nep kay ki)」と母は足袋をさしながら言って、小銭をかせいでいた。

「今は昔から見れば話しにならない時代で、昔いた神様（昔の事）は忘れられている。(タネアナク　シリ　チャン　ワ　テエタ　オカィ　カムィ　アネラムシカレ(テエタ　アン　ペ　カア　オィラ)　tane anakne sir can wa teeta okay kamuy an eramuskare (teeta an pe ka a oyra)」

〔本別　沢井トメノ氏〕

6－5－6．葬礼

葬式の時に、ネズミが死人の目を抜くものだと言われていたので、ネズミが来ないように夜通し番をしたものだ。

ライチシ　raycis〜ライチシカラ　rayciskarは、女達が亡くなった人を弔って泣く事で、亡くなったすぐ後、死体（ライクル　raykur）を家から運びだして墓場へ送る時、死体を墓に入れる時の三回行う。

死体を運び出す時、戸口（チセ　アパ　cise apa）に向かって右側の下の壁のヨシを寄せてくぐり穴をあけて外に出す。そのくぐり穴の外にヨモギを二本立ててアーチ状にし、その中をくぐらせた。最後になると、戸口にある敷居（トンチカマ　toncikama）にムシロをかけて、その上を踏んで外に出した。このようにするのは、戸口に神（アパ　コロ　カムィ　apa kor kamuy）がいるせいであろう。死体を墓まで（コッ　オロ　パク　kot or pak）担いで運ぶのは男である。

死体を包むゴザは、ヤヤンキナ　yayankinaでできている。このゴザは生前に自分で用意してあるものだ。母もキナ　kinaだけではなく全ての死装束（ライクル　イミ）を用意していたが死ぬまえに火事になってしまい皆焼けてしまったのでかわいそうなことをした。本人よりもすこし早くあの世に行っただけのことだから、それでも良かったと思う。

仏さんに着せるものに黒い糸は使わない。脚半（ホシ　hos）（図14〜16参照）、手甲（テクンペ　tekunpe）（図18参照）、靴（ケリ　ker）も白いさらしで作る。頭巾（コンチ　konci）（図17参照）もさらしで作る。いっさい黒いきれは使わなかった。コルチ　korciの時も、エカシ　ekasの時も白いものばかりだった。死体は顔を全部は隠さない。死装束は裏返しに着せ（クットコイミ　kuttoko imi）、前後合わせて、袖口と裾にはさみを入れる。やぶったり（ソシパ　sospa）はしない。「袖を切れ、裾をちょっと切れ」（トゥサ　エトゥィパ　ヤン。イミ　オホントケ　ポンノ　ポンノ　トゥィパ　ヤン　tusa etuypa yan. imi ohontoke ponno ponno tuypa yan）という。何故そんなことをするのか知らない。

死体をキナに入れ、めどのついた木の針で、左前にしたゴザを刺して留める。そのめどにさらしを通して編んで行く。糸で縫ったあと、端を結ばず（イテクケ　ウコピテ　ヤン　itekke ukopite yan）、長いまま残しておく。そうしないと、死人が戻って来るとか言っていた。

墓は、セットムバ　settompaという（「ああ、ここに墓があったんだな」タアン　タ　セットムバ　アナ　コトム　シラン　taan ta settompa ana kotom siran）。墓は、チエトィ　cietoyでは、高台にあった。女の子を亡くした時、皆で墓に行った。墓標に黒糸と白糸を使うのは知らない。最後に盛り土してから、ヨモギでなぜて仕上げる。終わると、ヨモギは折ってその場に置いて来る。墓から帰る時には絶対に後ろを振り向くな（イテクケ　シオカケン　インカラ　アニ　itekke siokaken inkar ani）と言われた。

〔本別　沢井トメノ氏〕

6－6．動作・しぐさ

久しぶりに会った時は互いの体をさすり合うウルィルイェ　uruyruyeという挨拶をする。女同士では互いの手、頭をさすり合い、男同士では膝かぶをなぜ合う（コクカパケ　ルィルイェ

kokkapake ruyruye)。女は女客があるとエタク　テエン　エク　エパケ　ク　ルィルイェ　etak teen ek e pake ku ruyruye「入ってください。あなたの頭をルィルイェします。」といって招きいれる。男同士はイシオロレ　isiororeと言いながら膝をなぜ合う。

昔のアイヌの人は、道で会っても丁寧に挨拶する。おばあさん同士が道で会うとお互い静かにイシオロレ　isiororeと言い合うのが尊敬した言い方だ。たとえば、次のように言う。

イシオロレ、イイソネカ　エタプ　ピリカ　アン　ル　アン　isiorore, iisoneka, etap pirka an ru an.「久しぶりですね。ああよかった。お元気ですね。」

イスシルクラン　イイソネカ　エタプ　ピリカ　アン　ワ　ウヌカラ　アン　ル　アン issirkuran iisoneka etap pirka an wa unukar an ru an.「驚きましたね。ああよかった、お元気でおられますか。」

アヌタリ　ウサ　ピリカ　アン　ワ　ウヌカラアン　ル　アン。　an utari usa pirka an wa unukar an ru an.「御家族も元気でいらっしゃいますか」

イイソネカ　ピリカ　アン　ワ　モンライケ　アン　カン　シリキ　ア　ル　ヘ　iisoneka pirka an wa monrayke an kan sirki a ru he.「ああよかった、お元気でお仕事しているようですね。

イッシリクラン　アノカィ　ウサ　エタプ　ピリカ　アン　ル　アン　issirkuran, anokay usa etak pirka an ru an「驚きましたね。あなたもお元気ですか」(相手が一人でもアノカィという言葉を相手に使うのが敬う言い方だ。)

客を迎える時、男の客が戸口まで来たら、主人が出て、オンカムィ　onkamuyし、エラリゥパ　erariwpaし（両手を胸の前で上下に揺すり、髭をなぜ下ろす）エタク　アフン　ワ　イコレ　etak ahun wa ikore「入ってください。」という。

女が客として招かれて食事をいただく時など、右手のひとさし指で鼻の下を横にさすり、イヤィライケレ　iyayaraykere「ありがとう」とかヒンナ、イイソネカ　エタプ　イペ　ケラアン　ナンコン　ル　アン　hinna, iisoneka etap ipe keraan nankon ru an「ありがとう。おやおや、おいしそうな食事ですこと。」という。この作法をライメク　raymekという。

赤ん坊はすっかり裸にして(オッアラ　エカチ　アトゥサレ　oar ekaci atusare)モゥル　mour のなかに入れて育てる。母親が座る時は、左足の膝を立て、右足を伸ばし、右足のももの上に子供を座らせる。赤ちゃんはすっかりモゥルに隠れているので外からは見えない。

図8．赤ん坊の抱き方

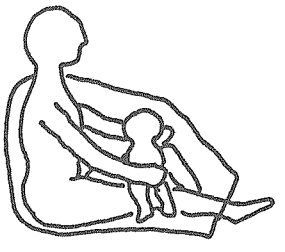
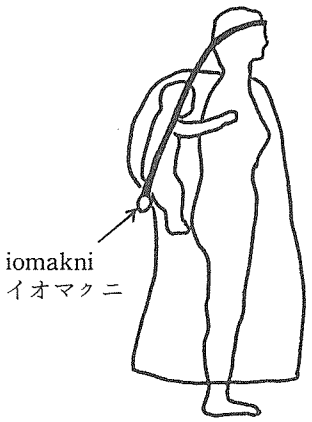


図9．赤ん坊の背負い方



赤ん坊を背負う時は、モゥルの中の赤ちゃんを背中にくるりと回し、モゥルの外のイオマクニiomakniに腰掛けさせる（図9．赤ん坊の背負い方）。イオマクニにはひも（タル　tar）がついていて母親の額で支える。赤ちゃんのおしっこは母親の背中を伝って流れる。母親が背中をそらしているのを見たことがあるが、特にふいたりはしない。「赤ちゃんは裸にしておぶるのがいい（エカチ　アン　アトゥサレ　ワ　ア　カィ　クス　エシタプ　ピリカ　ル　アンネ　ekaci an atusare wa a kay kusu estap pirka ru an ne）」と良く言っていた。

女は見だしなみが良かった。（ピリカ　イミ　pirka imi）。男（オクカィ　okkay）も40、50代までは見だしなみが良いがエカシになると身なりが悪くなり、背中あぶりばかりするようになる。

カムィノミの時など、女達は頭には何も付けず前髪を垂らして遠慮して座っていた。（ロクパ rokpa）。男達（オクカィ　ウタラ　okkay utar）を立てるためだ。

〔本別　沢井トメノ氏〕